

研究実施状況報告書

平成 31 年 3 月 / 日

長崎県立大学長 様

研究責任者 所 属 看護栄養学部 看護学科

職 名 教授

氏 名 久佐賀 眞理



受付番号 363	承認番号 350
I 課 題 特定保健指導を繰り返す対象者への市町村保健師の対応	
II 研究期間及び調査期間 研究期間 平成29年 4 月 7 日 ～ 平成31 年 1 月 7 日 調査期間 平成30年 8 月 28 日 ～ 平成30 年 9 月 30 日	
III 研究の実施状況（該当項目にチェックしてください） <input checked="" type="checkbox"/> 研究計画書どおり研究が終了した（公表方法： <u>修士論文報告会</u> ） <input type="checkbox"/> 研究計画書どおり研究を実施した <input type="checkbox"/> 研究計画を変更して研究を実施した 変更審査申請書提出（ 済 ・ 未 ） 変更内容： 変更理由：	
IV 今後の研究の概要（研究が継続の場合）	
V 研究結果の概要（研究が終了の場合） 本研究では、市町村支援者が認識する、特定保健指導の「積極的支援」を繰り返す対象者の特徴と対象への保健指導上の困難感を明らかにすることを目的に、特定保健指導の経験年数が長い保健師・管理栄養士計8名に半構造化面接を実施した。 市町村支援者が認識する「積極的支援」を繰り返す対象者の特徴として、7個のカテゴリーが、「積極的支援」を繰り返す対象への保健指導上の困難感として、6個のカテゴリーが抽出された。 「積極的支援」を繰り返す対象への保健指導上の困難感は、対象者がもたらすもの、支援者自身ももたらすもの、制度がもたらすものの3つに大別された。対象者は、【努力しても結果が出ない】 【行動できず数値が維持もしくは悪化する】2つのタイプがあり、その背景には【仕事や家族を優	

先して生活リズムを変更できない【疾患の症状や治療により身体や生活に影響を受ける】等の特徴を抱えており、それが市町村支援者の【行動変容及び保健行動維持への働きかけ】【指導に伴うストレス刺激による症状悪化誘発への不安】等の困難感につながっていた。支援者は、【繰り返される指導に拒否感や諦め感を持つ】対象者に、自身の役割意識の強さから【指導の限界と諦めたくない気持ちの葛藤】を抱えていた。制度は、保健指導の評価視点の変化や、健診体制が【制度の縛り】につながっていた。

「積極的支援」を繰り返す対象者の特徴と対象への保健指導上の困難感の関係性を検討したことで、保健指導上の困難感を軽減するために、対象者がもたらす困難感には、職能団体との協力、家族も含めた保健指導、集団指導の導入が必要であり、支援者自身がもたらす困難感には、介入のタイミングを見計らう必要があり、制度がもたらす困難感には、医療機関との連携が必要であることが示唆された。

VI その他報告すべき事項